

地方部への移住者の意識にみる 地域の魅力に関する調査

大橋 幸子¹・湯原 麻子²・神永 希³

¹正会員 国土技術政策総合研究所（〒305-0804 茨城県つくば市旭一番地）

E-mail: oohashi-s92ta@nilim.go.jp

²正会員 国土技術政策総合研究所（〒305-0804 茨城県つくば市旭一番地）

E-mail: yuhara-a92ta@nilim.go.jp

³正会員 八千代エンジニアリング（株）（〒161-8575 東京都新宿区西落合2-18-12）

E-mail: kaminaga@yachiyo-eng.co.jp

近年、地方圏・農山漁村への居住の動きが注目されている。地方圏・農山漁村への居住などの動きをとらえ、地域の活性化等につなげる方法の一つとして、居住の動機に関連する地域の魅力を明らかにし、その魅力を伸ばす地域づくりが考えられる。そこで本研究では、地方部の魅力を明らかにすることを目指し、より人口規模の大きい都市から地方部へ移住した人を対象に、地方部への移住理由等について調査を行うことで、移住者から見た地方部の魅力を分析することとした。

その結果、移住者の意識として、地方部の物的資源の享受、地方部の物的資源の活用、地方部の人的資源への貢献・帰属を実現できる環境が、地域の魅力となっていること、都市部と比較して利便性が低いことが、地域の魅力を減ずる可能性は低いことなどが分かった。

Key Words : migration to the countryside, attitude survey, regional attraction

1. はじめに

(1) 目的

地方部から都市部への人口移動が続く一方、平成20年7月に閣議決定された国土形成計画の中でも「国土政策の観点からは、適切なコストや負担を前提に自ら決めるという自律の精神と、地域の違いによる制約を少なくするための多様な交流を重視しつつ、多様な働き方、住まい方、学び方等を可能とする多選択社会を実現するとともに、地方圏・農山漁村への居住などの動きをとらえ、地域の活性化等につなげていく必要がある」とされているように、地方圏・農山漁村への居住の動きが注目されている。

地方圏・農山漁村への居住などの動きをとらえ、地域の活性化等につなげる方法の一つとして、居住の動機に関連する地域の魅力を明らかにし、その魅力を伸ばす地域づくりが考えられる。しかし、地方部に生まれ育った人が必ずしもその地域の魅力について、十分に認識出来ているとは限らない。その地方では当然のことが外から見ると他にはない魅力の一つとなるなど、地域外の住民

の方が、その地域の魅力を客観的に認識している可能性がある。

そこで本研究では、地方部の魅力を明らかにすることを目指し、より人口規模の大きい都市から地方部へ移住した人を対象に、地方部への移住理由等について調査を行うことで、移住者から見た地方部の魅力を分析することとした。

(2) 既往研究

地域の魅力や特徴に関する研究としては、地方部の地域住民の居住に関する研究はあるものの、地方部への移住者に着目した研究は多くない。

U・J・Iターンなど農村等の地方部への移住者や、その移住理由に関する研究としては、山口ら¹⁾が、兵庫県篠山市において、U・Iターンを含めた農村集落の定住を示す指標と社会特性の関係を分析している。その中で、U・Iターンが多い社会特性として、子供活動、外部を受け入れる雰囲気을挙げている。また、岡崎ら²⁾が、宮崎県西米良村において、Uターン者増加の要因とその変遷を明らかにしている。その中で、Uターンの要因として、

転入初期（平成7～9年）は「家族・親戚」，「村民の交流・活動」，その後「就職口」が加わり，さらに「伝統文化」が加わったとしている．阿部ら³⁾は，徳島県の地方部において，U I J ターン人口移動の要因を分析している．その中で，アンケート調査の結果からは，U ターンについては人間関係重要度，I J ターンについては居住環境魅力度を移動要因として挙げている．

移住に関する研究の中でも，特に移住者の個別の移住理由からの分析としては，寺澤ら⁴⁾が，北海道において，過疎自治体への転入者の動向を概観し，転入経緯を分析している．その中で，「生活」と「仕事」の2つの視点から転入理由を分析して8つの転入タイプを抽出するとともに，中核都市と転入先の距離関係についても考察を行っている．

このように，移住理由は，それぞれの地域の特性と密接に関係していると考えられる．

そこで，本研究では，都市部と比べた上での地域の魅力を明らかにするため，地方部に魅力を感じて都市部から移住した人は，都市部と地方部の両者の特徴を認識していると考え，地方部への移住者の移住理由を調査し分析することとした．

2. 方法

(1) 調査の概要

本研究では，より人口規模の大きい都市から地方部へ移住した人に対して，移住の理由（動機，目的，きっかけ），自身にとっての移住地の魅力や利便性等について，個別インタビュー調査を実施し，結果を分析した．

(2) 調査対象

調査の対象者は，地方部に魅力を感じ，より人口規模の大きい都市から自発的に移住した人とした．

調査は，福島県小野町，鳥取県日南町，鹿児島県垂水市において，市町村の協力を得て，移住者に依頼した．これらの地域は，いずれも，移住・定住に対する行政の取り組みが積極的で，人口が10万人未満の地域，近隣都市等への通勤，近隣市町村からの通勤が少ない地域である．それぞれの地域の位置を以下に示す（図－1）．

a) 福島県小野町

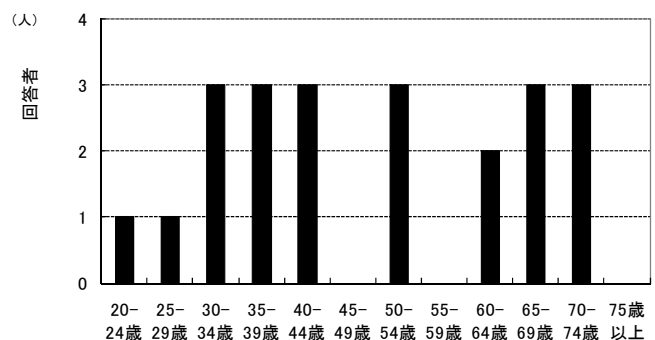
小野町は阿武隈山系の中中部，福島県田村郡の南部に位置し，四方を山々に囲まれている比較的緩やかな丘陵地帯である．磐越自動車道小野インターチェンジや，福島空港アクセス道路「あぶくま高原道路」により関東方面へのアクセスが向上している．

b) 鳥取県日南町

日南町は，中国山地のほぼ中央，鳥取県の西端に位置し，西は島根，南は岡山，南西部は広島と3県に接して



図－1 調査地域



図－2 回答者の年代

いる．

c) 鹿児島県垂水市

垂水市は，大隅半島の北西部，鹿児島湾に面するほぼ中央に位置し，県都鹿児島市と大隅半島を結ぶ海上陸上の要所である．北に霧島市，西に桜島，東は高隈連山を境とし鹿屋市に接している．

(3) 調査時期

調査は，平成22年10月から12月にかけて行った．

(4) 回答者の属性

性別，年齢，移住後の居住年数，移住前の居住地，車の運転の可否，移住前後の職業について，調査対象者の属性は以下の通りである．

3地域で，計22名から回答が得られた．うち，男性が15名，女性が7名であった．回答時の年齢は，図－2に示すとおり，20歳代前半から70歳代前半までであった．移住後の居住年数は，図－3に示すとおり，1年未満から約15年までであった．車の運転の可否については，2名を除き，外出が必要な時に自身の車での移動が可能であった．職業については，図－4に示すとおり，移住前は，民間企業・団体の勤め人，学生，自営業（農林業以外）が多く，現在（移住後）は，自営業（農林業），無職が多かった．

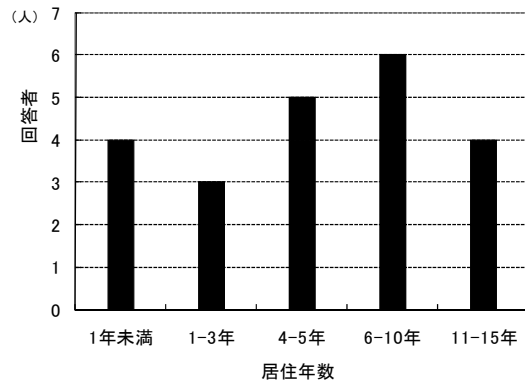


図-3 移住後の居住年数

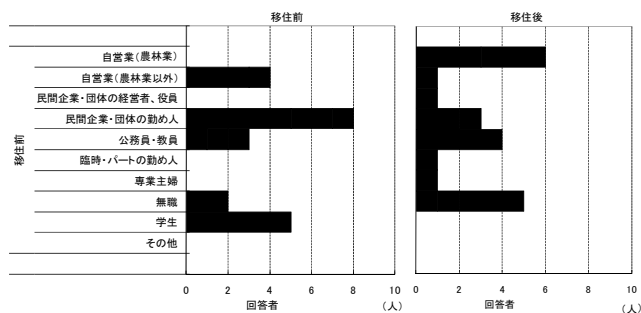


図-4 移住前後の職業

3. 結果

インタビュー調査結果を、移住理由、利便性、職業と所得に関する意識、子育て・教育環境、人づきあいに見る意識の観点からそれぞれ分析した結果を以下に示す。

(1) 移住理由

インタビュー調査結果を、移住時の動機および移住後に居住を継続している理由について、直接的な理由から分類した。

その結果、食材や気候、温泉などの自然や気候に関する要因、農業をするためという要因、希望する職業（農業以外）に就くためという要因、子育てや介護といった家族に関する要因と、大きく4つの特徴をみることできた。移住に際し、移住地を選択したうえでの職業選択か、職業を選択したうえでの移住地選択かについては、回答者により異なっていた。

ここで、移住時の動機および移住後に居住を継続している理由を、気候や特産物、田畑など物的資源と、人とのつながりややりとりなどの人的資源のどちらに関心が高いのかという観点、加えて、物的資源・人的資源とのどのような関係を望むかという観点の2つの観点から分析した。

結果を、表-1に示す。移住理由にみる意識として、地方部の物的資源を享受したい、地方部の物的資源を活

表-1 移住理由に見る意識

特徴	インタビューにおける発言	回答者
地方部の物的資源を享受したい	・もともと中山間地域や農作業が好きで、どこか田舎に住みたいと思っていた。幼少期に農業体験あり。 ・物をつくることや食べるものが、当たり前のように身近にあることが魅力。 ・寒い所は苦手。 ・将来は暖かい所で暮らしたいという話はしていたが、それが早くなった。 ・年をとって足腰が悪くなって、暖かい所で穏やかな老後を暮らしたいと思うようになった。 ・温泉のために来たようなものだ。	・約7名 ・30代～70代の男女
地方部の物的資源を活用したい	・家庭菜園は趣味の延長のように見えて興味が湧かなかった。仕事として農業をやってみたかった。 ・以前から有名な自然農法に興味があった。 ・作物の成長を見るのは楽しい。 ・観光資源を生かした事業（クラインガルテン、グリーンツーリズムなど）をしたかった。 ・自営業をしたい（子供に仕事をしている姿を見せたい）、自然の中で子育てをしたい。特に厳しい寒さが子供を鍛えるのに良いと思う。 ・地元の野菜の今まで感じたことのないおいしさに感動した。食材としてもっと広めたい。 ・日本の文化、気候、風土を芸術作品に反映させたい。	・約9名 ・20代～70代の男性が中心
地方部の人的資源に貢献・帰属したい	・やりたい仕事があり、必要とされている。 ・長く住もうと決めたのは、頼ってくれる周りの人がいたから。 ・この町の良いところは、やれることがあるというポテンシャルがあるところ。それをやらしてくれる人がいて、人柄も良いところ。 ・医療福祉分野の先進的な取組みに興味を持ち、ここで働きたいと思った。 ・この町は3世代同居が多いせいか学童保育もファミリーサポートセンターもないが、他の子供のお母さんたちと話をしていくなかで困っている人もいることを知り、必要性を感じた。そこで、子育て支援サークルを立ち上げ、ネットワークが広がっていった。 ・高齢者のエネルギーをどう引き出すかが今の課題である。例えば結のような濃密なものを復活させる、伝統と新しいものを組み合わせて再構築するようなことができたらしめたい。 ・退職後にUターンしていた夫の両親の病気を期に、家族で移住してきた。 ・家督を継ぐ、田舎を守るために戻った。	・約9名 ・20代～50代の男女が中心

用したい、地方部の人的資源に貢献・帰属したいという3つの特徴があることが分かった。

また、回答者の属性としては、地方部の人的資源に貢献・帰属したいという回答者のグループは、他のグループと比べて、若い年代の回答者が多い傾向があり、社会に必要とされることにやりがいを感じるという趣旨の発言が多くみられた。

これらのことから、地方部の物的資源の享受、地方部の物的資源の活用、地方部の人的資源への貢献・帰属を実現できる環境が、地域の魅力となっていることが考えられる。

(2) 利便性

インタビュー調査結果を、都市部と比較した地方部の利便性の観点から分類した。

結果を、表－2に示す。それほど不便ではないとする意見、不便さを積極的に受け入れようとする意見という大きな2つの特徴があることが分かった。また、これらの意見の他に、少数ではあるが、都市部と地方部の二地域居住により不便さを回避しようとする回答もみられた。それほど不便でないとする意見は、移住理由に見る意識として地方部の物的資源を享受したいとした回答者がほとんどであった。

これらのことから、移住者にとっては、都市部と比較して利便性が低いことが、地域の魅力を減ずる可能性は低いと考えられる。

(3) 職業と所得に関する意識

インタビュー調査結果のうち職業と所得に関する意識を、所得を十分と感じているかという観点から分類した。ただし、所得を得ていない回答者もいるため、必ずしも全体の傾向とは言えない。

結果を、表－3に示す。就業している回答者の意識は、所得は厳しいがそれ以上に別のところに価値を見出しているもの、所得は低いが問題と感じないというものと、大きく2つの特徴があることが分かった。

これらのことから、移住者にとっては、所得が低くても構わないというものではなく、地方部で実現できる内容の満足度が高い場合に、所得によらず地方部に魅力を感じていると考えられる。

(4) 子育て・教育環境

インタビュー調査結果を、子育て環境・教育環境について取りまとめた。ただし、すべての回答者が子育てに関係してはいないため、回答は極めて限定的である。回答を子育て環境、学力の面から分類した。

結果を、表－4に示す。自然環境や家族との近さの面から子育て環境が良いとする意見と、人数の少なさ等から学力水準を心配したり部活動や塾の選択肢の不足を指摘したりという否定的な意見と、背反する2つの傾向があることが分かった。ただし、この2つの特徴は回答者を二分するものではなく、一人の回答に2つの特徴が共存している傾向が見られた。

表－2 利便性に関する発言

特徴	インタビューにおける発言
それほど不便ではない	・今は急いでいるわけではないので、交通はそんなに不便だとは思わない。 ・今は不自由することがない。生活するには便利だと思う。
不便さを積極的に受け入れ	・利便性はもともと重視していない。多少悪い方がいいくらいだ。 ・インターネットや家族が外に出たときに購入するなどして補えばよい。ないなら仕方がない。何でもある方が異常なのではないか。 ・不便だからといって、道路を作りどこも一律にしてしまうのではなく、不便さが売りになることもあると思う。不便さの意味を伝えることも大切なのではないか。 ・不便な方がいいこともある。例えば、コンビニがあるから醤油の賞し借りがなくなる、道路が整備されて市街地にすぐ行けるだけ、地元の商店が廃れるなど。

表－3 職業と所得に関する発言

特徴	インタビューにおける発言
所得は厳しいがそれ以上に別のところに価値を見出している	・豊かになるかより継続性だと思う。お金儲けは簡単だが、継続性が難しい。そのためには、人のためになっていることが必要で、利益の多くをパートナー（農家）に配分している。自分の給料を上げるくらいなら、先行投資や経費にまわす。 ・農業で利益を上げるつもりはない。利益があれば、地域の活動などに還元している。 ・金儲けや名声を求めるならば、外国に行けばいい。自分は日本にこだわりがあり、この地方が自分のエリア、アイデンティティだと思っている。
所得は低いが問題と感じない	・バブル期は狂っていた。物質やお金よりも楽に暮らしたい。 ・人口が減少し始めて、江戸時代のバランスのとれた自給自足の暮らしに戻っていくのではないかと。 ・それなりに慎ましく清く貧しく。 ・給料は今で十分。 ・給料は低いけど、1人でやっていくのは問題がない。

表－４ 子育て・教育環境に関する発言

特徴	インタビューにおける発言
子育て環境が良い	・子供と一緒に町と自然を楽しみたい人、遊びたい人ではなく、自然を楽しみたい人なら移住もいいと思う。 ・娘と孫を呼んだ。最初は戻りたいと言っていたが、今は、子供が泥んこ遊びや走り回ったりでき、お母さん同士で家族ぐるみの付き合いもあり、楽しそう。 ・子供に親が働いている姿を見せたい。 ・自然豊かな環境で育てたい。特に、冬の厳しい寒さは、鍛えられるし、いろいろ工夫をするようになるので良い。 ・今は親の「利便」が優先されていると感じるが、自然がたくさんあって、情緒安定など子育てにはいい。 ・都市部で子どもを育てるのは危険が多い。
選択肢が少ない、学力水準が心配	・学習塾がないのが不便。遠くの町まで通っているが、送り迎えが大変。 ・町には学校が少なく、子供も少ないため、友達が選べない。いじめ、不登校など気になる。クラブが野球しかないなど選択肢が少ない。 ・学校の選択肢が少ないためこの町で子供を育てることは考えていない。自然は魅力だが、月1回遊びに来る程度がちょうどいいと思う。

表－５ 人づきあいに関する発言

特徴	インタビューにおける発言
人の温かさを実感	・人と人が近い。アットホーム。 ・移住者に対して行政がやさしい。何か困ったことはないか、と気にかけてくれる。来てみてわかったが、人口が少ない分まめに声をかけてくれる。 ・人間が温かい。知らない人でも挨拶することに感心した。 ・人柄が良い。 ・来てみて、人付き合いの大切さが分かった。これがないと楽しくないと実感している。 ・若い人が元気でつながりが強い。
人付き合いの壁を感じる	・地元の人、表には出さないが、外部の人に壁を作るところがある。 ・うわさ話や情報が早く、嫌ではないがびっくりする。 ・大多数の住民はずっと住み続けている人たちで、移住者は少数派のため、優先度が低く、住みづらい面もある。 ・言いたい事がなかなか言えない、言いにくい雰囲気があることも多い。 ・田舎ということもあり、年齢の近い人や立場の同じような人がいないため、人付き合いに苦労している。
移住者は人付き合いの壁をなくす努力が必要	・よそ者で1人で来たので、移住を検討しているときは地域の人とのかかわりを大切にしていた。慣れるまでは、なるべく関わろうとしたり、誘われれば行くようにしたりした。 ・外部の人に壁があり、踏み込みすぎないことが大切だが、何かトラブルを起こさない限りは、人情があるところも魅力だ。 ・移住される方は、地域に溶け込むよう努力することを心がけてほしい。何をしないと受け入れてもらえないかを考える。努力すれば必ず受け入れてくれる。 ・地域に溶け込もうと一生懸命やっているが、やりすぎもいけない。

これらのことから、移住者にとって教育環境が自身に影響するのは子育て時期に限定されるものの、地方部の魅力の一部を減ずる要素となりえる可能性があると考えられる

(5) 人づきあいにみる意識

インタビュー調査結果を、人づきあいの温かさ、人づきあいの壁という観点から分類した。

結果を、表－５に示す。人づきあいの温かさを感じたという意見が多くみられた。人づきあいの壁については、地元の住民の壁を感じたという意見がある一方で、移住者の方から壁をなくす努力が必要とする意見があった。回答者の属性としては、意見ごとの明確な特徴は見られなかった。

これらのことから、人づきあいに関する魅力については、地域によらず移住当初は移住者、地元住民のそれぞれの面から壁があるものの、多くの移住者がその壁を越え、人の温かさを感じているという状況が推測された。

4. 結論

本研究では、地方部の魅力を明らかにすることを目指し、より人口規模の大きい都市から地方部へ移住した人を対象に、地方部への移住理由等について調査を行うことで、移住者から見た地方部の魅力を分析することとした。

その結果、以下のことが分かった。

- ・地方部の物的資源の享受、地方部の物的資源の活用、地方部の人的資源への貢献・帰属を実現できる環境が、地域の魅力となっている
 - ・都市部と比較して利便性が低いことが、地域の魅力を減ずる可能性は低い
 - ・人づきあいに関する魅力については、地域によらず移住当初は移住者、地元住民のそれぞれの面から壁があるものの、多くの移住者がその壁を越え、人の温かさを感じている
- また、一部では、以下の特徴がみられた。
- ・地方部で実現できる内容の満足度が高い場合に、所

得によらず地方部に魅力を感じている

- ・ 教育環境が自身に影響するのは子育て時期に限定されるが、地方部の魅力の一部を減ずる要素となりえる可能性がある

このように、移住者が地方部に魅力を感じるのは、地方部の物的資源の享受、地方部の物的資源の活用、地方部の人的資源への貢献・帰属が実現できる場合であり、その場合、利便性や所得が直接的に地域の魅力を減ずる可能性は低いと考えられる。

地域の魅力は地域により異なり、それぞれに異なる移住者がその魅力に惹かれて移住していると言える。本研究における移住者の意識として、どこに住みたいか、何をしたいか、どう生きたいか、個人により優先度は異なるものの、移住はこれら3つの選択の再考を行った結果ではなかろうか。今後、移住者にとって魅力ある地域を考えるならば、利便性等を向上させることより、物的な地域資源を享受、活用できる環境、また、自己実現を図れる環境を構築することなどが考えられる。

今回の調査では、地方部への移住者を対象としたが、今後は、もともとの地域住民を対象に、地域の状況ごとに地域の魅力等を調査し、移住者の感じる魅力と比較することで、さらなる地域の魅力を見出し、今後の地域づくりの一助としていきたい。

謝辞：本調査を行うにあたり、ご協力いただいた多くの方々に深く感謝の意を表します。インタビュー調査で貴重なお話をお聞かせいただいた、福島県小野町、鳥取県日南町、鹿児島県垂水市の移住者の皆様には、心から感謝の意を表します。調査の実施に際して、一方ならぬご配慮・ご尽力をいただいた福島県小野町役場企画商工課、小野町ふるさと暮らし支援センター事務局、鳥取県日南町役場企画課、鹿児島県垂水市役所企画課の皆様には、深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 山口創，中塚雅也，星野敏：農村集落の社会特性と定住に関する実証的分析，農村計画学会誌，Vol.26, pp.93-100, 2007.
- 2) 岡崎京子，後藤春彦，山崎義人：U ターン者増加の過程における転入要因の変遷～宮崎県西米良村を事例として～，都市計画論文集，No.39-3, pp.25-30, 2004.
- 3) 阿部正太郎，近藤光男，近藤明子：地方圏へのU I J ターン人口移動の要因分析と促進施策に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.27, no.2, pp.219-230, 2010.
- 4) 寺澤淳司，久保勝裕，石田眞二，白木里恵子：北海道における地域圏の実態と中核都市との関係からみた転入者の動向に関する研究，都市計画論文集，No.40-1, pp.97-102, 2005.